

は、「第二次世界大戦が終り、新たにアメリカ軍が進駐し、ここにいわゆる基地を営んだ以後の発生にみることでできる」という。そして、この二つの基因が三沢市そのものの特質を形成したものと断じている。なお補遺として「八戸新産業都市指定と三沢市」や「開田、千拓」等にも言及している。

以上内容を紹介してきたが、ふりかえてみると、「三沢市史」は、三沢の歴史は決して特殊な歴史でなかったことを「小比類巻文書」その他によつて具体的に示し、三沢の歴史を考えざれたことに大きな意義があつたと思う。ただ、腹目を中心に内容を配列しているのも、もう少し歴史の流れがわかるように配列を工夫し整理してあつたらと思う。

なお著者は、「市民各位が日々生活するところに、三沢市史料の根源がひそんでおります。このことは、昔も今も変わりません。生活記録と改めて名をつけずとも、心算へのノート切はしち積りつものは立派な資料となるのです。」と、市民に、歴史に関心をもちよう呼びかけている。この言葉は、長年資料収集を行い、数多くの著作を発表した著者だけに実感として伝わってくるのである。

注一、根井分教場備付、大正三年。

注二、三沢尋常高等小学校「郷土の調査と各教科郷土化の実際」昭和十二年。

注三、中道等「津軽、南部の郷土資料に就て」、「書

誌」第三集、郷土誌料特別増大冊所載。

注四、小笠原二郎「修験道多門院文書の書誌的研究」、「うどう」第七十三号所載

(昭和三十九年 三沢市教育委員会発行

非売品)

斎藤 馨著

岩館斎藤家盛衰記

桜庭秀俊

津軽の旧家「岩館斎藤家盛衰記」。著者馨氏は斎藤家別家の九代目に当たるが、この別家は明和三年に二代甚助の三男惣助が別家したことに始まる。その後、両家は離合を繰り返しつつ、現在本家の直系が断絶したため、別家が本家を合併し、馨氏が引継いでおられるわけである。

本書は家蔵の資料を忠実に紹介し、又研究書を採用しながら斎藤家歴代を顕彰するのではなく、古文書の行間が語りかける歴代の声を私見や推理を交へ、できる限り忠実に記録しようとする姿勢が強く感じられる書物である。「旧家の多くは数代先にさかのほれば、その記録の覆れるものは極めて少ない。にも拘らず天正年代まで遡った系図が明瞭に遺され且全国屈指の富豪にまでの上った旧家は津軽地方には絶無といつても差支ないであろう。」と著者がいうほどもなく、岩館斎藤家は津軽藩

と密接な關係を持ちながら約三百年の長きにわたって繁栄したのであり、歴代が「敬諭書」「由緒書」「家法書」等の形でいとも母念に當時の有様を書き残しており、その多くが今日まで保存されてきたわけである。著者はかかる新藤家興亡の跡を物語る資料を子孫や一族のために整理し、念願し、それによつて「子孫の者達が己れの祖先の在りし姿を偲び発憤の動機ともなうは、この上もない幸である。」としながらも、本書は御用金の問題、凶作・飢饉の実態、農業経営方式等にわたつて、郷土史家の興味をひく点少しとしないのである。このような古文書の堆積の中から精密を期した解説により、本書の刊行という難事業をほとんど独力でなしとけられた著者に心から敬意を表したい。

本書の構成は、初代佐左衛門とその先祖から十三代哲夫に至るそれぞれ歴代の残した文獻を原文のまま紹介し、歴代法名・別家一覽と続き、付記として諸親族・縁類家系調が列記されている。著者は新藤家の由来が従来一般に余り知られていなかった理由としてあとがきで次の如く分析している。

一、新藤家は記録によつて見ると、歴代の当主が派手な生活を嫌い、あく迄も堅実第一主義で働き、特に津輕に入つてからは、開拓を主として余り政治の表面に出なかつたこと。

二、従つてその祖佐馬助は武士ではこの地に永住を決意

しても、子孫の生活安定は望めないと予見して、農業に専身を期したこと。

三、代々家系その継家當に関する記録は詳しく後代に残しているが、これを一概に公開するのを堅く禁じていたこと。

四、かかる状態で好調を保持した新藤家が、幕末、維新の動乱後極めて短期間に倒産したこと。

かくて本書の刊行によつて、民衆側の手による歴史叙述の徹底さと相俟つて、農民の生活等に関する今後の研究課題に示唆を与えてくれるものと考えられる。以下、歴代の記録を中心に青森県の歴史とのからみあいに視点を置き、重点と思われる事柄を重点的に紹介してゆきたいと思う。

そもそも平賀郡岩楯村が文獻の上で歴史に登場してくるのは鎌倉時代で、文治六年曾我時広が岩館村地頭代として平賀郡に下向して以来、曾我氏は鎌倉時代を通じて平賀郡に勢力をもち本果の有力な豪族であつた。しかしこの曾我氏も岩楯曾我、大光寺曾我にわかれて対立し、加えて鎌倉幕府滅亡にいたる動乱期に、それぞれ朝廷方、幕府方に立つて相争うことになる。更に根城南郡氏の津輕地区への進出で、曾我氏はしだいに南部氏に圧迫され、ほどなく滅亡したと考えられるが、その間の経過は明らかではないといわれる。

ところで、岩館新藤家は鎌倉末期から室町期にかけて

秋田氏の庇護下に津軽石川の開拓に着手、その後この地の支配者が南部、津軽と代わるにつれて、その支配下に入ることになるが、このことは天正二年に書かれた斎藤家系譜が物語っている。津軽地方が津軽為信によって統一され始める天正の初期、岩館斎藤家の租佐馬助は、この地に半士半農の生活を送り、寛文八年にその子佐左衛門（岩館斎藤家初代）に家督を譲っている。佐左衛門は津軽四代藩主信政に仕え、越後検地に随行して数々の功績をあげ、藩主から一字を賜わって甚助信次と名乗った程であった。やがて、藩への奉公を辞し、農業に専念することになるが、郷土として待遇され、藩の財政にも大きな影響力をもっていたと考えられる。

二代甚助は元禄元年に家督を相続し、この代には室町以来のこの地方の経営により豊かな経済力を基盤とし、又商取引に勝れた文能をもつていたこともあり、米銭の貸付等によって富を蓄積し、更に以後には藩命によって遠く上方方面とかなり大がかりな米の取引をなして莫大な利潤をあげ、藩の財政に大きな力となり自らも亦これによって大いに富力を増大したものとと思われる。この取引には平川、岩木川を輸送路とし、主として十三湊や鰯ヶ沢から船舶を利用しての逆路運送の方法をとつたものである。従つて当時、江戸、大阪、京都方面では、この取引で津軽吉尾甚助（商取引には特に斎藤姓を名乗らず、吉尾姓を名乗っている）の名は広く知られ、当時の全国

富豪番付にも上位にその名がみられる（一八〇九頁）といわれる程に成長していった。藩に莫大な金額の米金銭を納入できたのも、かかる米の取引による富力があつたればこそである。ちなみに、この代の寛延三年迄に御用立した米金銭は、米貳千貳百四拾俵、金子参拾六両、銭貳百七拾目となつてゐるが、これは表向の額であつて、実際はこれ以上の多額の米金銭を藩に納付していたものと考へてよい。

三代佐左衛門は宝歴十二年「家法五ヶ条掟し」を定めてゐるが、これは代々斎藤家の精神的支柱となつたもので、子孫の心構えを示している。

一、殺生決而不可致事、

一、正画ニツテ上ヲ敬、父母ニ忠孝、諸人愛敬可致事

一、夫婦和合、兄弟親ク、召使ノ者憐愍可致事、

一、無奢徳ヲ慎、課計ノ取扱不可致事

一、淫乱ハ短命ノ本、酒ハ誤リ多シ、無用ノ事、

この代にも藩に多額の米金銭を御用立してあり、又時の五代藩主信寿から数度の褒賞を受け、特に藩主から病氣見舞として朝鮮人参を贈られてゐる位である。この代に藩に御用立した米金銭の表向は、米五千百俵、金子八百五拾両、銭五拾貫目となつてゐる。

四代甚助は明和元年家督を譲られ、郷侍並御用達手伝役を仰せ付られている。この代には平川の川普請に精力を注ぎ、七代藩主信寧、八代藩主信明から褒賞を与えら

れるに至っている。「青森県史卷二」によると、「安永七年十二月朔日、大坊・岩館川除普請ニ功勞了リシモノヲ賞ス」とあり、岩館村郷士斎藤基助が金貳百匹を頂き、更に天明六年閏十月二十日に「郷士斎藤基助ニ養老扶持ヲ給ス」とあり、又同年十一月二十二日には紋章服着用を許可されている。「青森県史卷三」の享保元年二月六日には「補助米出精ノモノヲ賞ス」として五束御紋御上下を頂戴するに至っている。これら川普請以外に、藩に對する財政援助も行ない、そのことを物語る多くの記録も遺されているが、この代の御用立米金銭をみると、米貳千六百九拾俵、金千三百四拾兩、銭百八貫四百貳拾目、料百五拾俵となっていて、代々額も多くなつてきており、又一代のうちに御用立を命ぜられる回数も頻繁となつてきているのである。藩にとつて、藩内の富豪に對する御用金は大きな財政収入であり、しばしば強制的にこれを割当て、本来償還せらるべき性質のものであつたが実行されず、献金と同じようになる場合が多かつたのである。

五代佐左衛門は天明六年に家督を継ぐことになるが、子孫の爲の教訓として「常々心置之事」を遺している。これは三代佐左衛門の「家法五ヶ条控」に基づいて、更にこと細まかに心得を述べたものである。ところで、近世の本県には元禄八年、宝歴五年、天明四年、天保三年、九年の四大飢饉があつたとされているが、この代には天明の大飢饉があり、これに際して斎藤家では「へび塚

」に小屋掛をして、毎日拾数俵の粥を炊いて難民に与え、餓死者は合同埋葬して供養塔を建てている。又居村の岩館部落民に對しては一日一人二合宛の米を与えるといつた具合に、斎藤家では難民救済に自費を投じて飢饉という苦難を克服しようとしたのである。凶作の年は「米・豆・小豆・麦・蕎麦の類買入備置くべき思慮第一に候、左候へば窮民を救ふにも宜しかるべく」（九と頁）という個所にもうかがわれるように、難民救済には積極的に対処しようとしたのであつた。飢饉に關しては、九代佐左衛門が明治二年に「凶作についての心得帳」を遺しているが、打ち続く凶作の肩據を知ることができる。当時の経済が米作に依存していただけに、農民も凶作に對しては痛心していたのであるが、過去の体験を細々と書きつられ、これが対策に並々ならぬ努力を払つていたのである。又慶応三年にまとめられた「家法農業秘書」には、当時の農法や凶作の心得等について記されているが、農民の農業経営に對する真剣さを知る好資料であるといえる。この代にも藩へ御用立した米金銭も、米千五百俵、金子九百五拾兩、料三百俵と相当額にのほつている。なお又、文化十二年七月、若殿様が御鷹野に出た折平川洪水のため帰城できず、そのまま斎藤家に三日間宿泊することとなり、その間の苦心が細々と記されているのが興味をひく。

六代基助は寛政八年家督を継ぐことになるが、この人

婿養子で而も早死にしており、と代元次郎も文政四年に家督を相続しているが、これ又早死にすることになる。更に文政八年に家督を継いだ八代常作も早死にしているが、藩への御用金や平川の改修工事等には相当の出費をしたようである。なおと代目の文政七年にも御用立金四百五拾兩師と付られ上納している。比較的高齢に患まれた斎藤家が、六、七、八代と短命であつたことは一つの感慨を思ひしめるものがある。

九代佐左衛門は幕末、維新の激動期に遭遇し、斎藤家の衰運を挽回せんと尽力するのであるが、十代甚助の失策によつて倒産の憂目にあることになる。天保年代から明治初期にかけての平川大洪水、自家全焼、農地買上と相次ぐ苦難に出合うことになり、斎藤家にとつては大きな試練に立されることになる。文政十年十一月、藩は富豪三十五人に御用金二万兩の調達を命じているが、斎藤家には千五百式拾兩割當られている。これは藩が一応借利の形式をとつてはいるが、その後江戸藩邸が類焼したために、強制的に献金せられる羽目となった。その後天保年間には毎年のように米金銭の上納を命ぜられ、凶作時には「御用米金等仰せ付けられ候ものに候間、へ一む六匁」と心得て内々準備しておかねばならないと諭している位である。この代に上納した米金銭を合計すると米七百四拾俵・杓式百五拾四俵・金式千六百兩式朱・錢拾六匁目、外に長勝寺へ御祠堂用地買入のための献金百

兩、南沼池土上ヶ御普請のための献金拾兩となつてゐる。文政十年の割當の内訳をみるにつけても、藩財政も頻繁にこれらの献金によつて、急場をしのぐ状態はならぬ程、逼迫してゐたことが如実に知られる資料であらう。なお又、この天保年間には打ち続く冷害、凶作に見舞われ、この代にも「農業方被害」として凶作に対する心構えを述べている。

十代甚助は明治七年に家督を相続し、明治十二年に「家法書」として奉公人達を取締る掟を遺している。明治十二年の「大日本持丸長者鑑」によると東前頭六枚目に津輕吉尾甚助の名がみられ、未だその財力は相当のものと思われたが、その後数年にして、近親の間柄にあつた今村勇吉郎の甘言に乗せられ倒産のやむなきに至つてゐる。これに際し、九代目佐左衛門は「再興之良策」を述べ、更に「改革候約記」には家運の再興を期して、家計の改革に対する注意書等をも書き遺すなど、できる限り生活を切り詰めようとしてゐることが、各条項に切実に感じられる。

十一代幸次郎は明治十八年に家督を継ぎ、倒産後の仕末や家計の整理に奔走することになる。その後十二代豊次郎、十三代哲夫と続くが、十三代を以て岩館斎藤本家は直系が絶え、現在著者に引継がれてゐるのである。

かくて一応の概観をみてきたわけであるが、とまれ膨大な資料は三百年の長きにわたる時代の重みをずっしり

と感じさせるものがあつた。なほ、二代基助以後津輕藩の庇護をうけて上方方面と米の取引に従事していたことについては既述したが、当時の上方地方特に京都・大阪等へ起つた出来事へ特に大塩平八郎の乱に関する記録は各方面より注目されている。についての詳細な記録も数多く遺されているので、その公刊を希望するものである。頻繁に課せられる御用金にも応じざる経済力、それは藩と結託して米の販売権を握つたことに依るのであるが、そういう藩との特別の關係上、斎藤姓を名乗らず吉尾姓を名乗つたものと考えられる。その名も広く知られ全国富豪番付の上位にランクされる等の経済力をもつて藩の財政を一手にひきうけていたものである。しかし、藩との特別の關係のこととあつてか、米取引そのものに関する記録は全く残されていないといわれる。又、打ち続く飢饉を自己の経験に基づいて、積極的に乗り切ろうとした農業経営の記録は貴重な資料であり、これを単なる一農家の資料としてとらめおかず、特に青森県の歴史の中に位置づけ、評価し、活用すべき価値ある資料であると考えらる。筆者が及ぼす著者の意図するところを充分に紹介しえないことをおそれるものである。

(本文一七九頁、昭和四十四年十一月、非売品)

発行者・青森県平舘町大字岩館 斎藤家)

★受贈 交換図書目録(1) 45・4・1～5・9

MUSEUM	227・239	東京国立博物館
萬葉	73・75	萬葉学会
新しい道史	36・44	北海道史稿集所
岩手史学研究	54号	岩手史学会
東海史学	5号	東海大学史学会
紀要(史学科)	14号	中央大学文学部
歴史教育	18巻1・5・8号	歴史教育研究会
社会科学	Vol. IV No. 1	
九州史学	43号	同志社大学人文科学研究所
史学	42巻3号	九州史学研究會
青森県内出版物総目録(44年版)		青森県立図書館
学研究—人文・社会科学篇	才18号	
早稲田大学教育学部		
蘭学資料研究会研究報告	231・232号	
蘭学資料研究会		
教育学部研究報告	才20集	秋田大学
駿台史学	25・26号	駿台史学会
立正大学文学部論叢	才37号	立正大学文学部
龍谷大学論集	才392号	龍谷大学